

秀 賞



素敵な笑顔

福島県郡山市立郡山第一中学校

三年 箭内 舞 弥

「一緒に過ごせる時間は限られているけど、その限られている時間の中で思う存分、みんなで楽しいことしようね。」

—限られた時間。

私は「限られた時間」というものが好きではなかった。「限られた時間」それは「いつかは終わりが訪れるもの」と思っていたからであった。でも、その思いを覆すような出来事があり、それまで閉じていた思いまで、開いてくれる素敵な友人に出会ったことで、今こうして楽しく生活できているのだと思う。

今から約一年前、私は山形に転校した。

転校は何度かしているから、転校を恐れてはいなかったが、少し緊張はしていた。いつものように自己紹介をして、教室でもまた紹介をして：。「いつもと同じ感じね」と思いながら自分の席に着いた。私が席に着いたらもちろん、みんなが集まってくる。このような光景は転校を経験した人ならば想像できる、よくある光景だろう。

このときの私は、まさか自分の人生を変えてくれるような一生の親友に出会うとは思ひもなかった。

その人は、ちょうど私の席の後ろに座っていた。彼女が最初に私に話しかけてくれたのだ。席も近

かったせいか、私たちは自然と仲良くなった。私自身も彼女たちの仲間に入れてもらい、認めてくれたような感じがして、とてもうれしかった。彼女はとてもおもしろくて、優しく、明るいことがチャームポイントだ。転校して一週間、私たちはある事で大笑いをした。「大笑い」学校で大笑いなどしたことのなかった私は、最初は「笑っていいのかな」と戸惑ったが、その心配はすぐに晴れた。「学校でこんなにも笑って良いんだ」とわかったことに、とても驚いた。今までは「笑わない場所が学校」と思っていたほどだったから。

こうして私は、彼女たちと今までにない、「最高の中学校生活」を送った。まるで夢のような時間だった。彼女たちと一緒に、体育祭や合唱コンクールなどの行事を行うとともに絆が深まっていくように感じた。特に、合唱コンクールでは、彼女が指揮者で、私がパートリーダーだったから、どうすればクラス全員がよりよい合唱ができるか一緒に考えた。そんな光のような時間が過ぎていくある日、「再び転校することになった」と彼女たちに伝えた。もちろん彼女たちは、とても驚いていた。その時に伝えられた言葉が一番最初に書いた、あの言葉だった。

そして私は再び転校した。

でも、彼女たちのことは忘れられず、「再び山形に戻りたい」と思う苦しい日々が続いた。途方に暮れて、気が抜けている状態で毎日を過ごしていたある日、ふと、あの言葉が頭をよぎった。

「その限られている時間の中で思う存分、みんなで楽しいことしようね。」

この言葉を言っている彼女の表情が目には浮かぶ。もちろん、とびきりの笑顔で。

「そうだね」私は気がついた。

「限られている時間」というのは、いつか終わりが訪れるものではない。ずっとつながってゆくんだ。山形で過ごした夢のような時間は限られている。すべての時間は限られている。しかし、限られている時間に終わりが訪れても、すべてが終わりではない。この世の中には限られている時間はたくさんある。でも、一つ一つの限られた時間の中で思う存分楽しみ、学び、悲しみ、喜んでいくことは大切だと思う。なぜならそれは、次の限られた時間への第一歩、いや、かけ橋となるからだ。

時間は過ぎてゆく、流れてゆく、その過ぎ去った時間は消えるのではなく、ずっと私の心の中にあるもの。それが、彼女の言葉から学んだこと。

そして、考え方を変えるだけで、これほど楽しい日常生活が送れるということに気がついた。私の目の前には新しい世界が広がっている。このことを教えてくれた彼女たちに感謝し、毎日を大切に過ごしていきたいと思う。

「一期一会」私はこの言葉が大好きだ。

いつ、どこに、どんな出会いがあるかわからない。だから、その一つ一つの出会いを大切にしていきたい。